

浪江の こころ通信

● 第91号 ●



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第91号」への感想をお寄せください。

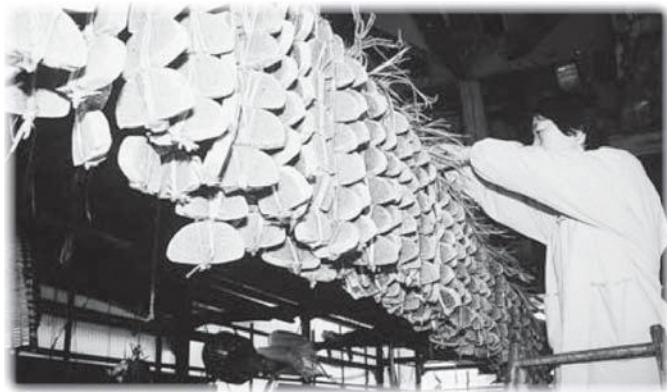
【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593

再取材シリーズ

再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から7年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。



浪江町ゆかりの人

思いをはせる浪江のこころ

未曾有の大災害により甚大な被害を受けたふるさと浪江町。

震災前にふるさとを離れた方、町と関わりがある方が抱く浪江町への思い、復興を支えるために果たしたい思いなど「浪江町ゆかりの人」の声をお届けします。

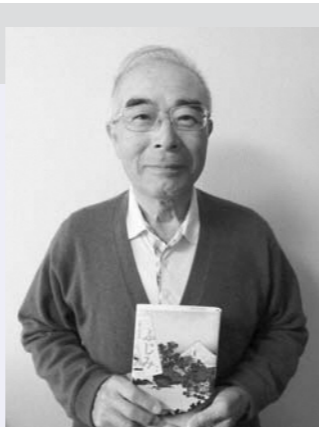


白瀬 美智男さん(田尻)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永
取材日：10月10日

除染待つ仮設の壁に農事暦

「震災前に川柳との出会いがありました。原発事故で被災し、各地を転々。そんな時、出会って間もない川柳が避難生活に生きがいをもたらしてくれました」と語る白瀬さん。第13号（平成24年7月号）掲載時、「今の生活を少しでも活力あるものとするために、前向きに頑張りたい」とお話しされていた言葉どおり、川柳づくりとウォーキングで、頭と心と体の健康を保ちながら、現在もご家族そろって京都でお過ごしです。



▲合同句集を手に笑顔の白瀬さん

◆川柳作句が日々の日課
出身は、南相馬市です。双葉高校勤務の関係で浪江町に移住し、40年近く住みました。その後、福島県教育センターに勤務し、この時に川柳と出会ったんです。今では川柳作句が日々の日課です。川柳仲間もできて、合同句集を出すこともできました。冒頭の句に「農事暦」とありますが、退職後の楽しみにと、早くから畑を借りて準備してたんですよ。300坪、広いでしょ。柿の木もあって、良いところだったんです。が、諦めざるを得なかったですね。

◆浪江から京都へ
発災時、息子はプログラム・エンジニアとして浪江町に就職していましたが、その息子が出張先の東京で買った線量計が反応するんです。情報が錯綜する中で、いわきの線量が低いということだったので、最初の避難先の福島市からいわき市へ行きました。ですが駄目、やはり線量的には高かった。孫のこともあるので、娘家族は旦那さんの仕事先の京都へ移動させました。その後、インターネットで調べたら、その京都が避難者受け入れをしていたんです。電話をかけたなら「すぐにどうぞ」と言っていたので、4月24日の真夜中に出て、翌25日の夕方に京都へ到着。これから住むことになる府営住宅には、地域の

皆さんが待っていてくださいました。阪神淡路大震災の受け入れ経験があるから、とのことでしたが、本当に有り難く胸がいっぱいになりました。

こうして京都での避難生活を始めましたが、浪江で楽しみにしていた農作業もできない、釣りもできない、パークゴルフもない、ないないないの、そんな日々が続きました。川柳だけでは引きこもっていたでしょうが、浪江にいた時からやっていたもう一つの趣味、ウォーキングで救われました。今は1日1万歩を目指し、ウォーキングを日課にしています。ウォーキング協会にも所属していて、月5、6回は京都府内を中心に、あちらこちらを歩いていますよ。

◆家族の思い
受け入れていただいた京都の府営住宅で2年半過ごしました。が、「いつまでも他人様の家にいるよりも」と、全財産をばたき、マンションを購入しました。浪江の家には米を置いていたのでも、とんでもない数の野ネズミがすみ着いていました。だんだんと朽ちていく我が家を解体し、庭の片付けなどをやりましたが、その後、1年くらい行っていません。でも、家が無くなったからといって



▲ランチタイムはバイキング形式。イカニンジン、ひきなまり、いわき市から取り寄せているトマト等から、好みのものを。

『瀬のしろ』～和ダイニングバー～
京都市伏見区桃山町山ノ下55-15
TEL 075(644)5770
http://senoshiro.seesaa.net/



佐藤 秀三さん(権現堂)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：11月13日

浪江の子供たちから元気をもらいながら、新しい浪江を創っていきたい

佐藤種苗店を営む佐藤さんは、権現堂区長会、浪江町行政区長会の会長を務めておられます。

震災前からの区長のご経験を生かし、「浪江の復興は、人が住めるようになること、誰もが立ち寄りたくなる町になること」をモットーに、新たな浪江のまちづくりに奔走していらっしゃいます。



▲復興祈念として収集を続けていらっしゃる御札と御朱印帳を収めた部屋に案内していただきました。「震災前と同じように家族全員で氏神様への初詣ができたことがうれしかった」そうです。

◆避難中、厳しいと思ったことはなかったですね
あの震災が起きた日は、私の誕生日でした。運転免許証の更新に出掛け、新しい免許証を手に店に戻ったら、経験したことのない大きな揺れ。津波警報が鳴り、区長だった私は、気になるお年寄りが何人かいたので区内を一回りました。幸い皆無事でしたが、私たち家族は3月15日まで津島活性化センターに避難しました。原発事故の情報は全く入ってきませんでしたね。その間、すぐに自宅に戻れると思っていたので、権現堂の区長さん方数人と震災ごみの片付けの相談をしていました。

その後、全町避難となり、

◆「困った時の秀三さん」と、毎日、大勢の方が訪れます
平成28年9月に実施された特例宿泊の時から、うちの店に浪江町内で人の集まれる場所を作ろうと、種苗の陳列をしていた大きなテーブルを改修しました。そして帰還準備期間を経て、いの一歩に町に戻ったんですよ。最初にテーブルを活用してくれた手芸グループから始まり、浪江に戻った人たちが浪江を訪れてくださる人たちが、ここに毎日訪れてくれます。

区長としての今の悩みは、回覧板が町内に回せず、情報伝達が難しいことです。どのように伝えるか、いろいろ試しているところなんです。七夕の短冊に「浪江町内のごみ拾いをしよう」と書いたことがきっかけで、まち

二本松市あだたら体育館から温泉へ。そして二本松市安達運動場仮設住宅へと移りました。「この場を何とかしたい」と、避難先のホテルでも仮設住宅でも自治会を立ち上げ、避難先の地元の方々と関わりながら、毎日を生懸命に楽しく過ごしてきました。中でも、安達運動場仮設住宅は、当時244世帯560人の最も大きな仮設住宅で、初代自治会長を務めました。

◆廃炉や復興は急がずともいい。人が住めば、町は必ず復興します
大震災による津波被害と原発事故で全町避難を余儀なくされた、町の人たちが離れ離れになった浪江でも、人が住めるようになれば、震災前と違った形でも必ず復旧、復興は成し遂げられると私は信じています。今、浪江に帰っている私にとっては、復興度88%なんです。これからは「誰でも立ち寄りたくなる浪江町」を目指して、これからも町のいい所や伝統文化、季節の行事などを発信し続けながら、日々楽しく過ごしていきたいと思っています。

づくりの団体と一緒にクリーン作戦を行ったところ、福島市や会津地方などから大勢の人が集まってくれました。

また、「チームなみえG&B（Gは爺ちゃん、Bは婆ちゃん）」を立ち上げ、なみえ創成小・中学校の子供たちと触れ合いながら、校内の花壇作りや清掃、給食を作って一緒に食べた。夏休みにはバス旅行にも出掛けています。地域ぐるみの運動会の開催も呼び掛け、250人も集まり大盛況。子供たちを励ますつもりでしたが、私たちがの方が元気をもらっていますよ。



ふるさと浪江会

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：11月9日

「ふるさと」の復興を応援したい



▲和やかに意見交換



▲ふるさと浪江会役員メンバー

ふるさと浪江会は平成22年に、「ふるさと納税制度」を活用して浪江町を応援しようと、関東圏に暮らす浪江町出身者で立ち上げられました。

東日本大震災後は、「ふるさとを忘れない」という思いで、支援のための寄附活動や浪江町への視察バス旅行などを行っています。

会長の原田直之さんは、福島県内はもちろん全国各地で公演を行い、歌を通して浪江町民の交流と元気づくりを進めています。

ふるさと浪江会

設立当時の会員は70人、現在の会員数は120人。

浪江町出身者で関東圏に暮らす人たちがメンバー。

連絡先：ふるさと浪江会事務局
木幡正行さん
TEL 090(5585)3861

前登録をしないとお墓参りにも行けません。父や母のお墓の前で、ゆっくりと手を合わせられる日が早く来ることを願っています。

●木幡 正行さん

田尻出身です。父母は震災で、浪江から秋田の姉夫婦の所に避難しました。その後、東京の私の所に来て一緒に暮らし始めましたが、父は亡くなり、今は母一人になりました。母は「帰りたい」とよく口にします。震災後、年に4、5回は浪江に帰りますが、行くたびに壊れていく家を見るたびに辛くなります。浪江に行っても、人がほとんどいない町は不思議な感じがします。昔ながらの田尻、浪江はどうなっているのでしょうか。役員関係者さまや地元に戻られた皆さまが頑張っていることは応援いたします。今後、5年10年後はどうなっているのか、元の町に戻るのか心配になります。

●吉田 敏英さん

刈宿出身です。震災前は、お盆と年末年始に浪江に帰っていました。帰れることが当たり前の前でしたが、それができないのが悲しいです。母校の双葉高校は、震災で休校。同窓会が毎年5月に開かれています。新し

●原田 直之さん

浪江町は、海もあり山もあり、自然豊かな町。ふるさとを離れて55年余り、いつも浪江を思い歌っています。一番の思い出は十日市ですね。3日間、町を挙げてのイベントで、子供にとっても大人にとっても大きな楽しみでした。東日本大震災で、浪江の実家も無くなってしまいました。次世代の人たちが浪江に戻って、暮らすことができるようになったらと願っています。

●斉藤 仁也さん

酒井の出身です。丈六公園の裏側に実家があり、林あり田んぼありの環境でした。川で年中泳いでいました。わんぱくで勉強はあんまりしませんでしたね。80歳を越えても、病気一つしないでいられるのは、小さい時に走り回って遊んで培った体力のお陰と思っています。5人兄弟、皆それぞれ遠く離れて暮らす今、お墓参りにも皆がそろえることが難しい。自分が元気なうちに浪江の復興が見られたらと思います。

●能勢 秀幸さん

樋渡出身です。生まれも育ちも浪江で、震災後、先祖代々の家の屋根を直したら、親戚から「住める当てもないのにはかない卒業生が入ってこないという現実寂しさが募ります。

●浅野 節子さん

室原出身です。ふるさと浪江会の立ち上げの時から関わってきました。7人兄弟ですが長男以外は浪江から出ています。私も高校卒業以降、東京で暮らしています。実家は、19代続く農家ですが、震災以降はお墓参りの時にしか実家に立ち寄ることはありません。浪江のインテリゲンチングから見ると、ただ入れないという現実にもどかしさを感じます。妹が映画関係の仕事をしていて、震災後4か月目に町に入りました。請戸の家並みが津波で流され土台だけが残り、内陸に船が押し流されている光景や「車の窓は開けないでください」という言葉に「がくせん」としたことが思い出されます。実家には、申請をしないと入れない状況です。家の中は泥棒に荒らされ、庭にあった灯籠まで持ち去られてしまいました。思い出がたくさんある家が荒れていくのを見るのは辛いです。

●作間 清子さん(浅野さんの妹)

室原出身です。「ふるさととは遠くなりけり」と言いつつ、いつでも帰れると思っていたふるさとがもう無くなってしまっ

ね！」と言われました。やはり愛着があるので、住める状態に戻りたかったです。しかし、修繕を終えた後、イノシシに侵入されて取り壊しせざるを得ない状況になってしまいました。子供たちに話したら、小さい頃に遊んだ家を見てみたいと言うので、取り壊し前に一緒に浪江に行くことになりました。

●大清水善信さん

幾世橋出身です。「ふるさと浪江会」設立の時から関わっています。高校卒業までは浪江にいました。フナ釣り、ドジョウ取り、思い出はたくさんあり、浪江のことはいつも心から離れません。浪江町出身の人たちが集まるこの場があって良かったと思います。町役場から協力の依頼があれば、対応したいと思います。

●見山ミチ子さん

大堀出身です。実家は大堀相馬焼の窯元です。登り窯への「窯入れ」や「窯出し」の時には、請戸の浜で取れた魚など、ごちそうがたくさん並び、職人の皆さんと一緒にいただきました。壊れた器でままごをしたことや、高瀬川で取れたアユを庭先で炭火焼きにして食べたこと思い出されます。大堀は今もまだ、避難指示区域なので事



▲浪江町訪問旅行についての打合せ

●山田 攻さん

牛渡出身です。震災後、2年目に実家に行きました。実家の周辺は草ぼうぼうで、請戸の浜は何もない野原のような様子に驚きました。震災から4年目に、母が避難先の二本松で亡くなりました。今の浪江には、若者が働く場所がない。常磐線が全線開通し、企業誘致が進んだら違ってくると思います。国や福島県がもっと復興に向けた支援を行ってくれたらと思う。震災前は、浪江に帰ると同級生、同窓生に会えるのが楽しみでした。丈六公園の風景や十日市のにぎわいが思い出されます。